

ranging provisioned Japanese macaques at Takasakiyama were found to be reproductively more successful than low-ranking females, based on the analysis of age at first birth, interbirth interval, infant mortality and success in raising offsprings. In order to assess some of the possible constraints that might account for this differential reproductive success, nutritional intake was examined for both groups of adult female. Daily dietary items were analyzed for levels of energy, and amino acids. Overall levels of energy intake were found to be greater for low-ranking females during the winter and the summer. Although protein intake amounted to 30g for both high- and low-ranking females during the summer, it was limited to 23 and 19g, respectively, in the winter. Low-ranking females, however, did appear to be able to satisfy the minimum requirements for essential amino acids. These differences in energy intake and winter protein consumption are thought to be important contributing factors to the differential reproductive success of females of different dominance rank.

自由 : 12

高崎山に生息するニホンザル出産個体の採餌における積極的行動と周囲の許容性

横田 直人 (大分短大)

出産したメスは人工餌場において積極的で、あたかも上位のように振舞うことが知られている。本研究は交尾期シーズンにおける人工餌場内での出産個体の採食戦略を、採餌行動時の積極的姿勢と周囲の許容性に注目して調べた。本年度は、B群の12月から1月において出産個体を対象にした。餌場を1 m²の区画に区切って、そこに入場してから退場する間を連続個体追跡法で、①採餌時のポジション、②摂取時間、③摂取量を調べた。

コムギ採食時の上位個体のポジション移動回数は18.9回/日で、下位個体は17.8回/日であった。上位個体のコムギの総摂取時間は25.9分/日、下位個体は24.3分/日で、1 m²に区分した一つのポジションの滞在時間(摂取時間と等しい)は

上位個体が1.37分/回、下位個体は1.36分/回であった。移動距離は下位個体が上位個体を大きく下回った。コムギからの摂取エネルギーは下位個体が上位個体より約25kcal/日多かった。

一つのポジションから移動する直前に①エサが十分残っていて自ら退去、②少量のエサが残っている自ら退去、③エサがなくなってからの自らの退去、④あるポジションでサルの密度が高くなって、⑤上位個体に追従して、⑥他の個体の接近によって、⑦他個体の手による排除によって、⑧声での威嚇によって、⑨手と声による威嚇で、⑩にらまれて、⑪追いかけられて、⑫飛びつかれて、⑬咬まれて、⑭咬みついて、が観察された。

下位個体が移動した回数の90%はエサが残っていて自らポジションを移動したもので、上位個体は55%であった。エサがなくなってから移動した回数は下位個体では全体の4%、上位個体は31%で、他個体との関連によって移動した回数は下位個体では全体の5%、上位個体は9%であった。

出産した下位個体個体は、ほぼ同位の個体に比べより積極的にエサ場へ進入して高蛋白質含有量のコムギを摂取した。このとき上位個体から排除されて移動した回数は移動した総回数の約5%と低かった。すなわち出産した下位個体の採食行動は上位個体に許容されていたと考えられる。

自由 : 13

過去の林業政策の資料からみたニホンザルの生息環境の変化について

長岡寿和 (大分短期大)

猿害が多発する要因としてニホンザルの生息環境の悪化が指摘されている。本研究は、ニホンザルの生息環境に急激な変化をもたらした年代を、森林伐採面積、造林面積及び林道距離の3つの因子から全国レベルで分析した。この節目となる年代は、林業統計(農林統計協会)及び林業統計要覧(林野弘済会)をもとに抽出した。両者は統計手法が多少異なり必ずしも数値は一致しなかったが各因子の推移はほぼ同じパターンを示した。

1) 1950年～1990年の40年間の森林伐採面積で節目となる年は、最大のピークに当たる1960年と横ばい傾向を示し始める1975年であった。1960年には約50万haの面積が伐採された。

2) 1950年～1990年の40年間の造林面積の推移